

第 22 回「京都御苑ずきの御近所さん」

華道家元池坊 青年部代表
池坊 美佳 様



■いけばなの発祥の地とされる六角堂と池坊家の関係や歴史について、教えて頂けますか？

六角堂は、用明天皇2（587）年、聖徳太子によって創建されたと伝えられています。正式名は、紫雲山頂法寺と言いますが、お堂が六角形をしていることから六角堂と呼ばれています。お寺の由来を書いた縁起によりますと、聖徳太子が四天王寺を建立するための木材を求めて京都に来られ、疲れを癒そうと池で沐浴をされたとき木にかけておいた御持仏が動かなくなってしまったといいます。仕方なくその場で一夜を過ごされ、その夜の夢で見た観音様のお告げを受け、この地に六角のお堂を建てて御持仏を本尊に祀られました。その後、代々の住職が池ほとりの坊舎に住んだので「池坊」と呼ばれました。これが「池坊」という名の由来です。池坊の祖先は、朝夕仏前に花を供え、いけばなの名手を多く輩出してきたといいます。仏前の供花をはじめ、四季折々の行事の際に立てられる花が多くの人々の目にとまり、池坊のいけばなは六角堂の信仰を背景に広がっていきました。歴代住職の中には、文献に名を残す名手・池坊専慶がおり、『碧山日録』という禅僧の日記には専慶が挿した花々を人々が競って観に集まったという記録があります。また、室町時代後期には、池坊専応が草木の風情を重視することを説き『専応口伝』を著しました。初期のいけばなは「立て花」という簡単な構成の花でしたが、その「立て花」の構成はやがて複雑な型をもつようになり、「立花」が誕生しました。さらに、江戸時代初期には、立花の名手・32世池坊専好が活躍し、立花の一大ブーム巻き起こしました。後水尾天皇が京都御所や仙洞御所で立花会を催された時にも32世専好は指導的役割を果たし、池坊の地位を固めました。以降、立花は町民層へも普及するとともに、小座敷の床の間にふさわしい簡略な生花（しょうか）が生まれ、広く流行しました。明治時代になると、生花は女学校の教育科目にもとり入れられ、いけばなが飾られる空間は床の間に限らないものとなりました。そうした中、定まった型のない自由に花の美しさを表現する「自由花」が誕生し、現在も多くの皆さんに楽しんでいただいています。

いけばなは、もともとは仏様に供える花として時代を経てきました。池坊の歴史をお話するときに「池坊はもともと仏様に…」とお伝えしても「すごいですね」と感心されるだけで、その先が続きません。古くから伝わるものを守っているだけでは、現在もその先も生き続けることはできないと思います。日本には、昔はよかったのに、流行っていたのに、今はもう無くなってしまったものがたくさんあります。守るべきものと今のものを組み合わせないと伝統文化や伝統工芸というものは次の時代に伝わっていかないのではないかと思います。華道が伝統文化として継承されてきたのは、その時代、その時代の方々が必ず守るべきものの大切さと新しいものを取り入れる柔軟性を持っていたからだと思います。

いま、海外の方がいけばなをととても高く評価してくださいます。六角堂を訪れ、いけばなを見て「学びたい」と言ってくれるのです。私が小さい頃はグローバル化と言われ、語学が堪能な国際人になるために海外に目を向けた教育がされていたと思いますが、年齢を重ねた今では、まずは自分の国の歴史や文化を熟知することが何より大切だと痛感しています。3年後の2020年には東京オリンピックもあり、海外の方がたくさん日本を訪れます。だからこそ、個々の日本人が日本の歴史や伝統文化や伝統工芸を学んで日本の良さを認識し、誇りを持つことが大切だと思います。

ます。その上で日本の良さを発信することが私たちの努めだと思います。「日本ってすごいでしょ」だけではなく、その素晴らしいものを発信して次の時代に伝えることが私たちの役目だと思いますので、しっかり頑張らなきゃいけないと思います。

■池坊様が花を生けられる際に、最も重視する点、念頭に置く点はどのようなことですか？

いけばなとフラワーアレンジメントの圧倒的な差は、やはり「足し算の美学」か「引き算の美学」か、ということだと思います。フラワーアレンジメントの美は、たくさんの花をより華やかにということだと思いますが、池坊いけばなは、「空間の美」、「省略の美」と言われます。例えば、満開の花が五輪あったら一輪の美しさを際立たせるために他の四輪を落としたり、自然の風雨に曝された葉の趣きを表現するために、わざと綺麗な葉を手でちぎって自然の中での葉を現したり。花を見て「綺麗だ」と思う気持ちは誰しもが持っていると思いますが、いけばなは一度は切られた花に再び命を吹き込むようにいけるものです。自分がこの一輪の花をどう活かすことができるか、その花の美しさをどう表現することができるか、ということをととても大切にしています。いけばなは自分の心を映し出すものです。単に「花が綺麗」というだけではなく、そこには精神美があります。

また、いけばなに限らず、お稽古ではきちんとしたご挨拶、尊敬語、謙譲語など美しい言葉遣いも学ぶことができると思います。最近、テレビを見ていると、時々びっくりするような言葉が聞こえてきますが、気持ちのいい綺麗な日本語は無くなってほしくないと思います。お稽古を始められる方は、回数を重ねていかれるにつれ、いけばなへの向き合い方も徐々に変わってこられ、同時に言葉遣いや文化への向き合い方も次第に変わってこられます。男性の方に向けたお稽古の会もさせて頂いておりますが、最初はお稽古をしてもお花を持って帰るのが恥ずかしいから嫌だ、とおっしゃる方がおられましたがお稽古を続けられるうちに持ち帰られるようになりました。ご自宅でいけてみたら、お母様や奥様に喜ばれたという経験をされ、また、お稽古でいけた花を見て「この花は今の季節に咲くのだな」と学ばれ、いつも通る道で自然に咲く花に気付き「これ、この間お稽古をした花だな」と思われたり、年齢に関係なく、これまでになかったご自分の感性が沸き上がってくるようになります。

日本人は桜と紅葉が大好きですが、桜の季節が終わった後の新緑も本当に綺麗です。夏には夏の、冬には冬の花があります。それぞれの季節の花を知り、その美しさを感じてくださるようになっていただけるだけで私たちは嬉しいのです。

■国内外を問わず、華道の普及発展に尽力していらっしゃいます。その活動内容を教えて頂けますか？また、華道家としてみなさまへのメッセージをお聞かせください。

私の仕事のひとつには、日本全国に約400ある池坊の支部を回るという池坊としての活動があります。私に与えられた仕事は、いけばなを見たこともいけたこともない方、また、池坊はいけばなの流派だということを知らない方に、まずは、いけばなという文化が日本にあり、いけばなとはこういうものだということを「見て」「知って」「体験して」いただく場を拓けることです。そして、いけばなのデモンストレーションをさせていただくなど、いけばなを知らない方にいけばなで敷居が高いと思っていただけれど、自宅でも飾ることができるんだ、とかいけばなで楽しそうだな、と興味を持って頂けるような場を少しでも増やすことが私の務めです。

例えば、お知り合いの方から20人ほどでいけばな体験をしたいのですが、とご相談を頂いた時に何作かデモンストレーションをして、皆さんにいけばな体験をしていただきます。また、ホテルに作品を展示したり、イベントでのデモンストレーションをする機会も多くあります。

京都では、お茶を頂かれる機会が多いと思いますが、いけばなを体験していただく機会はなかなかありません。いけばなを見る機会があって、その時は見るだけで終わってしまったとしても例えば、何年か経った後やまた何かの機会で見れば、**「そういえば昔いけばなを見たことがある」とか「いけばなを始めてみようかな」と**思われた時に**「池坊美佳がいけばなをやっていたな」という記憶だけでも残っていたらいいな**と思います。

海外にも約100支部あるので、周年記念のイベントやユネスコのお仕事などで花をいけることがあります。面白いことにアメリカとヨーロッパの間でも国民性の違いがあって例えば、アメリカの方はどんどん作品が出来上がっていくことに対して大きな喜びを伝えてくださりますがヨーロッパでは**「どうしてそれを切り落とすの？」**と聞かれます。日本のいけばなの考え方はヨーロッパの方が近いかなと思います。

まずは、きちんと伝統文化の素晴らしさ、いけばなの素晴らしさを知らない方々に伝えることが私の役目だと思っていますから、デモンストラーションの依頼があれば、それが100人であっても20人であっても、できるだけお受けしたいと思っています。

■思い出の中で京都御苑にまつわるものはありますか？

私は、葵祭で斎王代を務めさせていただきました。務めさせていただけたことは、御所でのいちばんの思い出です。20年以上も前のことですが、未だに**「斎王代をされてましたよね」と**度々言われます。恥ずかしくて**「いやいや、本当に昔のことなので」と**お返事します。京都御所で支度をして頂き、お輿に乗せて頂いたことは本当に良い思い出です。

あいにく、葵祭当日は大雨で翌日に順延になりましたが、下鴨神社に行って、お詣りをさせていただき、翌日に改めて巡行しました。当時は、雨が降ったことに落ち込んでいる私に心ある方は**「本来、葵祭は京都が風水害にみまわれ五穀は実らず疫病が流行った祟りを鎮めるためのお祭りなのだから雨でも気にすることないですよ。」**と仰ってくださいました。人生でなかなかない経験ですし、いちばん御所を身近に感じた瞬間ではなかったかと思います。京都の新緑の中を練り歩きましたが、お輿の上から見る京都の風景はまた違って見えました。緊張していたので、どれくらいの時間が経っているか分かりませんでした。ゆっくりと進んで贅沢な時間を過ごさせていただきました。人生で忘れられない経験です。

■また、京都御苑で好きな場所、好きな時期などありますか？

京都の北区に自宅があり、オフィスは六角堂ですので、小さい頃は学校が終わった後や夏休みなどによく京都御所に立ち寄っていました。御所の一般公開の時期には、御所の周りに人が多くその光景を観て**「そうか、今一般公開をしているんだなあ」と**思っていました。私は何でもない時期の御所が好きです。もちろん、多くの観光客がいらっしゃる春や秋も好きですが、何でもない季節に京都御所を歩くと自然が溢れていて、お友達とご飯を食べに行く前に少し歩いたりしても気持ちよくて御所は私の中で空気感が違います。

京都には緑のある場所はたくさんあると思いますが、御所は何か違います。例えば、六角堂は生まれ育った場所なので私にとってはホッとする空気感があり、私の帰る場所です。でも御所の場合は、何か改まった自分を想起させてくれます。京都人には御所に天皇が住んでいらしたという意識があるように思います。私にも同じ意識が小さい頃からあったのだろうとは思いますが、やはり斎王代をさせて頂いてからは、私にとって御所は尊く、特別な場所なのです。

京都には、私にとっての御所のように近くに自分をリセット出来る場所が皆様にもおありかと思っています。そういうところが京都の素晴らしさだと思います。京都の街は、かならず自分の好きな場所に出合えます。みなさん、いろいろな場所で京都の思い出があると思いますが、それは素

晴らしいことだと思えます。

■京都御苑の今後について、御意見などございましたら自由におっしゃってください。

私は京都に生まれ育っているので、今のままで充分だと思えます。

御所は近くて尊い場所であってほしいです。

御所はもちろん、私が生まれ育った六角堂もまずは訪れていただいて、空気を感じていただければ幸せです。ご自分の好きな風景が絶対に見つかると思います。

2017年5月24日 インタビュー
聞き手：田村省二，積田真希子

○池坊美佳さま プロフィール○

華道家元 45 世池坊専永の次女として生まれる。佛教大学社会学部卒業後、華道家元池坊総務所に勤務。皇太子殿下結婚式宮中晩餐会をはじめ、国内外のイベントにて、いけばなの普及発展に尽力。著書に『永田町にも花を生けよう』（講談社）がある。